

県・都市医師会も災害時業務 継続計画(BCP)の策定を

八幡浜医師会 越智 元郎

南海トラフ地震には90年～150年の周期性があると言われ、大津波を伴うマグニチュード8クラスの地震を繰り返してきた。わが国には南海トラフ地震の他に首都直下型地震、温暖化災害など各種災害の脅威があり、厚生労働省は2017年、すべての災害拠点病院に業務継続計画(BCP)の策定を義務づけ、一般の医療機関に対してもBCP策定を推奨している。また、介護施設・介護事業所、障害福祉サービス事業所等に対しても2024年度以降、BCP策定を義務づけている。各レベルの行政や医師会は災害時にこれらの組織と連携し、支援すべき立場にある。災害時における行政の対応計画は地域防災計画として策定されるが、医師会もまた業務継続計画としてまとめておくべきではないだろうか。

2024年5月、第79回八幡浜医師会総会後の懇親会に出席された村上県医師会会長は冒頭の挨拶で、前月に発生した豊後水道地震(4月17日23時14分、八幡浜市の震度は5弱)を振り返り、南予地域医師会員の被災状況が気にかかり電話を入れてみたが、南予の医師会への電話に出た職員はいなかったと述べられた。地震災害後、どのくらいの震度であれば幹部や事務局が参集するのか、緊急連絡網で会員の安否を確認するのか、救護所を設置するのか。上記の地震は具体的対応の基準に当てはまらなかったということだろうか(あるいは基準自体がなかったか)。

八幡浜医師会は2015年、八幡浜市及び伊方町と災害時医療救護活動協定を結び、災害時に行政が設置した7箇所の救護所に会員を派遣することを決めた。発災直後の初動を円滑にするためには、施設やライフラインの被災・復旧条件を加味した業務継続計画を定めておく必要があるのではないかと¹⁾。

筆者から見て、災害時における八幡浜医師会の第一の懸念は八幡浜医師会館(以下、

会館)である。会館は1978年建築で、震度5強(旧耐震基準)を超える南海トラフ地震により、倒壊・崩壊の危険がある。さらに、その立地は八幡浜湾から約1,000m、標高は海拔2.1mである。海拔7mを超える大津波が千丈川を高速で遡上し、発災から80分余りで会館に到達、会館内のすべての設備を流し去ると予想される。職員は重要書類、機材などを持って、地震の後80分以内に会館を離れ、当医師会の災害対策本部設置を予定している八幡浜市保健福祉総合センター(以下、センター)へ移動する必要がある(勤務時間外発災では、自宅などからセンターへ向かう)。

第二の懸念は、八幡浜市救護所ならびに代替の医師会本部を置く予定のセンターである。センターは1999年11月、旧愛媛県八幡浜地方局の建物(1963年建築)を改修したもので、耐震診断済みである。敷地の標高は7.0m、1階床面は9.0m。発災80分後の推定津波高は敷地面から1~2mと予想され、傷病者や関係者が徒歩で同施設へ近づくことは危険かも知れない。医師会員が対応する市救護所や医師会災害対策本部は4階多目的ホールに設置予定である。ここに浸水の危険性はないが、地震直後のエレベータ(以下、EV)停止時には傷病者や医療機器等の搬送・移動は困難となる。さらに市内停電が予想され、1週間以上のEV停止もあり得る。

筆者は2024年の総会において、会館の耐震診断を提案した。しかし、その後の理事会報告などの情報から、現会館を早期に諦め、災害対応可能な新会館として移転・新築する方針が定まったことを知った。その立地や新医師会館の規模・デザインは今

後計画がまとめられていくことになる。ここで、筆者が強く要望したいのは、新会館が災害時の八幡浜医師会の拠点となり、また八幡浜市救護所を兼ねることである。さらに、67%が「未治療死」に至る²⁾とされる愛媛県沿岸部の住民のための機動力、特に小型ヘリ発着に限定された市立八幡浜総合病院ヘリポートと並立する、大型ヘリ用のヘリパットを近接設置することである。

筆者は2012年から10年間、愛媛県災害医療コーディネータ(災害拠点病院コーディネータ)を拝命して各種の活動が続けて来た³⁾。その主眼点の一つが行政と八幡浜医師会との救護活動協定であった。これが南海トラフ巨大地震発災時に確実に機能するように、八幡浜医師会が(できれば近隣の郡市医師会や県医師会も)事業継続計画を策定され、できること、できないこと、できることをどう実現するかを発災までの5年、10年、20年(それ以上の猶予はイメージし難い)の間に、具体的計画として策定されることを切望する。

参考文献

- 1) 越智元郎:八幡浜医師会・事業継続計画(BCP)策定への提案,八幡浜医師会報 2023;通巻85号:19-24.
- 2) 布施明,大西光雄,宮内雅人ほか:南海トラフ地震における急性期災害医療のシミュレーションを用いた“未治療死”の検討. Japanese Journal of Disaster Medicine 2024;29:213-219.
- 3) 越智元郎:愛媛県災害医療コーディネータとして,10年間の活動を振り返って. 南予医学雑誌 2024;24:67-77.